

全員が納得する そんな答えなんかあるものか、 あるいは「学ぶ」ということ

高木 信

※

この文章は、高校国語教科書の準定番教材である葉山嘉樹『セメント樽の中の手紙』を論じようと思って書き始めた論文の序文である。けっきょくは本論に至ることができなかった。まだ諦めないつもりなので、来年には『セメント樽の中の手紙』論をきつと「相模国文」に書いているだろう。気になる方は、来年度の「相模国文」を見てください（去年は、じつは今年「櫻坂46論」を書くと言っていたのだが書けませんでした。せめて新シンドルの一節だけでも……と書いて）。

※ ※

最近の話題から始めてみよう。どんな事例をとってもほぼ同じことにしかならないのである。なぜならあまり

にもバカらしい例が大量にあるからなのだ。ここでは麻生太郎財務大臣とかいう人物がまた吠えたそうであるから、それを使ってみる。

麻生氏は講演で、国民皆保険に言及した際、自身が生まれた1940年当時から平均寿命が延びていることについて「素晴らしい」とし、「いかにも年寄りが悪いと言っている変なのがいっぱいいるけど、間違っている。子供を産まなかった方が問題だ」と語った。さらに、社会保障を支える現役世代が減少し、高齢者が増えているとして「高齢者でも働ける人は働いてもらおう」と話した。（『読売新聞』オンライン・二月四日（月）22:33配信）

このような発言は過去にもなされており、一貫した氏の主張のようだ。「産まなかった」世代がどの世代のことかはよくわからない。安倍晋三氏の世代なのか（安倍晋三氏には子どもがいない）、それともいまの中年世代なのか？ あるいは若い三〇〜二〇代のことなのか？ よくわからない発言なので麻生氏が言っていることを勝手に補足しながらまとめると、『少子高齢化社会がきているが、老人は若いころにがんばったのに、そしていまも努力し活躍しようとしているのに、年金を老人に与えるのは税金の無駄遣いだとか、若手に仕事が来ないのは老人がまだいるからだということ』を理由として、老人たちは悪者にされる。しかし、そうなったのはすべて少子時代になったからなのだ。つまり少子化の原因となった「産まない奴」がいっぱいいたから少子高齢化社会になったのであり、産まない女性が悪いのだ。』ということなのであるかと読み取った（子どもの出産には男性の役割も絶対に必要なのだが、「産まなかった」という老人の言説は女性に対してのものである）。もちろん批判が巻き起こった。で、ご本人はどう言っているか。

麻生氏は同委員会で発言について、「高齢化より少子化の方が財政の持続可能性の脅威になることを申し上げた。全体を聞けば趣旨は理解してもらえ」と説明した。麻生氏は2014年12月にも同様の発言を行い、「誤解を招いた」と陳謝した経緯がある。（『読売新聞』オンライン・二月四日（月）19:00）

このように述べている。さてここに「誤解」はあるだろうか？ 高齢化社会は医療などの発展によってもたらされたものである。老人たちが身体を鍛えたから高齢化したのではないだろう（僕がいまも生きていられるのは医療の発達のおかげだ。ただ高齢まで生きられるかどうかはまったく不明だが）。高齢者が多くなって、それを支える人間が減少したことを、少子化が問題だと主張したいときに、子どもが少ない＝産まない奴がいることが問題だという因果律を形成したのである。たぶん、麻生氏は。少子化が財政を圧迫する。それは「産まなかった方」に責任がある。どのように読んでもこの因果律と原因を女性にしている点は動かないだろう。

しかし、別の文脈（コンテキスト）と文法（コード）で読めば、意味が違ってくる（だから「誤解」と言いた

いのなのだろうか？」と言いたいようだが、コンテキスト（文脈・話の流れ）もコード（意味を生み出す文法）もこの発言においては複数化できない以上、『子供を産まない奴がいっぱいいるから少子化になったのだ！』という主張は、かならずここには存在している。つまり誤解のしようはないのだ。⁽¹⁾

つまり、麻生氏には「国語」的読解の力の基礎も、その発達形態としての解釈力・考察力もない（ふりをしてゐるのならすごいが）のであろう。言葉の意味、用法、論理構成などすべてにおいて、自分の発話を正確に読めないのであるから、「誤解」などと言えるのだ。

めちゃくちゃ腹が立つが、政治についてはここでは口出しするのはこれ以上はやめる。このような答弁は厚生労働省も、財務省も、そしてわれらが超弱小省庁である文部科学省様も同じようなことを行っているしやるのであります、が。

しかし反省すべきは、一九七〇年代から八〇年代にかけて、テキスト論という文学分析の方法が流行った（僕はいまだにテキスト論者なのだが）。テキストをより面白く読み取ろう。作者の意図などわからないのだから、テキストの意味をどんどん自分たちで作りだそう。この

ようなスローガンのもとさまざまな豊かなテキスト分析がなされた。すべての〈読み〉は〈誤読〉であり、これらの誤読たちがテキストの一義性を破砕することができると。しかし、九〇年代ころからテキスト論が下火になるのだが、テキスト論的発想（テキスト論的な読み方を）を新自由主義（新しい保守派）が、使用しはじめた。

「どんな読み方もがゆるされるのなら、自分たちも好きに歴史資料を読む。でもそれを批判することはできないでしょ？」という発想である。テキスト論は常識や規範を攪乱するためにあったのだが、新自由主義者たちの物語の読み方は、非常に保守的イデオロギーにのっとりたものである。かつてのテキスト論は、常識的な・保守的な読み方を批判するものであったのだが、自身のイデオロギー性を明確にできる理論がなかったため、新しい保守主義者に乗っ取られてしまったのである。

このような流れのなかでは、麻生氏の発言の意図は、聴き手に任されることになる。しかし、麻生氏の発言も、彼自身の自由な読み方に委ねられるのだということになってしまふ。

このようなところに、テキスト論の限界が示されるのである。しかしテキスト論が持っていた言説の分析技術

をもつてすれば、麻生氏の発言のイデオロギー性をあぶり出すことは可能なのである。〈われわれ〉は読むというところが、たったひとつの意味を見つけ出すことでも、複数の意味が存在する混沌を生む出すことでもないということを、信じなければならない。

※ ※ ※

少し迂回しよう。僕にはじつは息子がいる。たまに愚痴がたまると連絡をくれる。彼はいま法科大学院に通っていて、定期試験や予備試験などを受けている。僕は話を聞いたのだが、うろ覚えなのである。でも次のような話題だった。

この前の期末テストで、「X氏とY氏とが民事で争っていてそれぞれの主張が記されて、そこに加えてZ氏の証言がある。」というような設定の問題文を提示されて、民事訴訟の実務としてどのように処理するのかという問題が出たそうだ（ちょっと理解が及ばない世界である）。彼（息子）は、いままで見てきた問題でZ氏が登場するものがなかったので不穩に感じながらも、Z氏抜きで解答を仕上げたという。あとで友人と話すと、Z氏の証言が微妙に重要なものであったと言われたそうだ。僕は

「そりや、初めて出てきたZ氏に意味がないわけじゃないやん」と言ったら、「そりや感じるけど、それを書いてたら最後まで書き切れない！」と主張していた。二時間半のテストで、ほぼ二時間、万年筆で書き続けないと解答を終われない量のテストらしい（いまだきなせ万年筆？とは思うが）。

で、彼に聞いてみたのは、「複数の主張があつて、複数の判例があつて、複数の条文があるなかで、与えられた情報をきちんと読み解かないとどの凡例や条文を参照するかを決めて解答はできないのではない？」ということであつたが、答えは簡単で、「当たり前ですよ」である。彼はすごい読書家というわけではない。東野圭吾、宮部みゆき、真保裕一、湊かなえなどを讀んだり、それらの映画を見たり、映画の『聲の形』や、つい最近は映画『明日の僕は、昨日の君とデートする』を觀て号泣するような普通（？）の青年である（そのあと小説も讀んだらしいが）。

しかし、彼が言うには「伏線をきちんと読み取ったら、『明日僕』は一時間もしたら（物語の半分くらいのところで）、もう涙が止まらないんだよ、君も觀なさい」。

これを書いているいまは、『明日僕』を觀たあとであ

る。で、僕もちょっと（いやだibun?）感動したのだが、終わりの二〇分くらいで、ようやく哀しみにひたつた。息子には「感動するポイントが、遅すぎる」と批判された（テキストの読み方で彼に負けるなどと思っていなかった僕としてはちょっとしょぼりした）。僕はさまざまなテキストを見たり読んだりしてきて、タイトルにある「明日」、そして「昨日」の存在としてある「君」とデートするというのは、ねじれた時空でしか発生しないと思って見ていくのだが、登場人物がどのような経験をどの時空でしているかを想像すると哀しみのポイントは、彼が言うようにもつとずれた場所（物語の初発から）にある。が、ネタバレになるのでひとまず置こう。

そこで彼に聞いたのは、「法学系の問題って、文章読解能力がなかったら解答できないんじゃない?」ということである。彼の返答は「当たり前。僕がなんとか戦えているのは少しは文章を読んできたからだよ」であった。彼が読んできたものは、純文学は少ないし、ゲームや麻雀を好むちょっと昔の若者である（もちろん教科書や入試問題などは熟読したであろうが）。そのような人物が書かれていることの裏側、隙間、伏線。因果律の存在とその回収については、きちんと読み込んでいるのである。

僕は高校時代、英語も現代文も大嫌いだった。英語は、英作文で辞書の一番上（和英辞典を使用）にある単語をつなぎあわせて、英文にすると（コンテキストというものがわかってなかったただけなのだが）、教師は「あー、こういう言い方はしないんだなあ、ここは……となる」と理屈抜きで正解を示してきた。へななでそういう言い方しないって言えるんだよ!」と思っただけ×をつけられたとき、僕はそれが言えなかった。そして担任の倫理の教師（僕は彼が嫌いだった）が、「現代文ができない奴は、英語も倫理もできないぞお」と言っていた。僕は倫理はできたが、現代文と英語とは壊滅的だったので、「はあ?」と思っていたが、いまになると（いや高校教師時代にはすでに）わかるのである。

息子が言うように、文章の微細な部分まで、そしてその文章のコンテキスト、コードまで、きちんと理解し、他のコンテキストやコードで読んだらどうなるのかまで想定しなければ、法律的に（そして文学的に）も、戦う文章も書けないのだ。

現在、教科書も読めない若者がいるのだから、文学的、評論的文章ではなく、一義的に決定できる文章を読む能力を高めなければならぬという論調もあるようだ

が（「新学習指導要領」のことをここでは念頭においている）、それはねじれた理屈だと思う。子どものころから、おとぎ話、昔話、絵本、簡単なアニメなどを読むこと（あるいは観ること）で、あるテキストのなかにあるコンテキスト（文脈）、コード（読むための文法）がどのようなものであるのかを学んでいく。

この訓練によって、この発話、この文章は、どのようなコンテキストで、そしてどのようなコードのもとで成り立っているのかを認識できるようになるはずだ。その上で、やがては、きめられたコンテキストやコードを逸脱して読んだらどうなるのかを試行錯誤して考えられるようになるのだろう。そして新しい自分なりの解釈をしていくことになるだろう。そうでなかったら文学の分野で「卒論」など書けないのではないか。

そして他者と解釈が違ふとき、あるいは同じ解釈であつたとしても、どこに着目してそのような解釈に至ったかを語りあう（こっそり話す）こともあるだろう。そして自分が着目できなかったテキストの断片（たとえば小さなフラグやちよつとした発話）に気づくことがあるだろう。

契約書のような一義的なコンテキストとコードのもと

で確定されたひとつの意味だけを、発信者が受信者に送り、その一義的意味を受信者が理解するというテキストを先に学んだとき（センサー試験に代わる共通テストの問題がこういったものを素材としている）、はたして複数のコンテキストやコードのもとで読まれるテキスト、そしてテキストの内部に複数のコンテキストやコードが内蔵しているテキストを、試行錯誤して読むということが可能になるのだろうか。

文学の言語は日常言語とはたしかに違う。だが、逆説的なことだが、文学言語を読み続けることが、複数のコンテキストやコードが存在するなかで一度はひとつのコンテキストやコードで解釈してみるものの、別のコンテキストやコードにのつとつて解釈してみると別の解釈が生まれてくるという体験を重ねることを可能とし、そのなかで、日常言語におけるコミュニケーションも、ひとつの発話を、どのコンテキストやコードでその情報を読めばいいのかわかるであろう。

そうでなければ、ギャグも（関西系のギャグは関東ではまったく伝わらないが。とくに自虐ネタ。それはコンテキストやコードを異にしているからだ。関東人が学べばすぐく笑えるはずだ）、言葉遊び（掛詞）、アイロニー

(いやみ) もアナロジー (類話) も寓話も理解でない。

新共通テストは、複数あるコンテキストやコードがあるなかで、この文章について、ひとつのコンテキストやコードを正しく選び取り、正解をひとつ出さない」という姿勢だと言うほかならう。

※ ※ ※

僕たちがこの日常を生き延びるためには、麻生太郎の「誤解があるなら」という不思議な主張を、彼の発言しているコンテキストとコードにおいて、絶対的に誤解は発生しないと言わなければならないであろう。なぜなら自分たちが持っているコンテキストやコードを総動員しても、別のコンテキストやコードが見つからないからだ。

同時に、複数の法的解釈 (大げさだが、卑近なところでは「いじめ」などについて) がある場合には、どのコンテキストとどのコードとを利用して、自分 (あるいは他者) を救済できるかを考えねばならない。

このふたつの主張は一見矛盾するようだが、これは同一の事象に対して複数の解釈が成り立つという主張に対して、ある場合には「複数性」は成り立たないと主張で

きるか、あるいは別の事案では複数の解釈のなかから被告人がいかに有利になれるかを、詳細に検討する読解力・論理解析力にこそかかっている。

政治家で財務大臣で副大臣の麻生太郎が言うのだから信じようという思考停止に陥っていたら、けっしてたり着くことのない地平である。

※ ※ ※

過去の思い出が蘇ってきたので、記しておきたい。僕が高校一年生ときの話である。隣のクラスの現代文の教師は、独自の解釈をとうとうと授業で述べるスタイルで、同級生たちは困惑していた。《その解釈であつてゐるの?》というわけである。テストの答えは、その授業通りに答えなければならない。ある意味では現在の大学で行われている授業の「スタイル」には近いだろう。しかし、たぶん、多くの大学の授業は先行研究を抑えた上で、自分なりの解釈を構築して、根拠や論理的説明を明確にして行われている (と信じている)。

さてその教員は演劇部の顧問でもあり、森鷗外『舞姫』をアレンジした演劇を上演した。エリスには親友の女性がいいたというのがアレンジされた箇所である。全校生徒

でそれを観た（観劇させられた）。そのあとの授業で、僕のクラスの現代文担当の教員が、『エリスに親友がいたら、発狂することはありえないのではないか。あの演出・解釈は間違っている』と批判（悪口？）を言っていたのが強く記憶に残っている。ひとつには『そんなもん見せるなよ』という憤りであり、もうひとつは『なるほど、そういう理屈が成り立つのか』という驚きであった。しかし授業ではエリスの孤独ということを学んだ記憶はないのである。太田豊太郎という青年の恋と仕事との狭間での苦悩ということとで授業は終わったのではなかったろうか。しかし国語の授業に発見や驚きがあると思ったことが驚きであった。

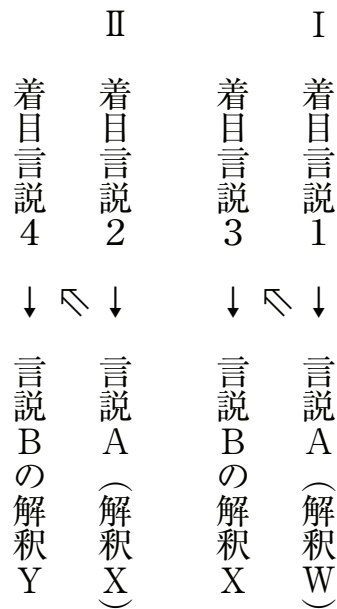
ここでは、なぜエリスに親友がいてはいけないのかということに理屈があつて、それをきちんと伝えるべきであるということが重要で、現代文の授業は〈理屈〉と〈論理〉とを重視してはしなかったということが言いたい。

評論教材は、指示語、接続語、キーワード、二項対立などをきちんと押さえていけば、普通の授業はできるはずである。しかし絶対的に必要なのは、教員の知識と論理構築能力、そしてプレゼン能力であろう。教科書と指導書とに書いてあること以外のことを動員しなければ、

説明できないこと（を質問してくる生徒も多いし、授業を深めるためにも必要）が、けっこうあるからだ。

小説で言えば、どのコンテキスト、どのコードを強調して読むかによって、テキストの内容読解も違ってくるであろう。

たとえば、テキストのなかには複数の言説は配置されている。着目言説とは生徒が着目した、あるいは教員が着目した言説のことである。



着目言説1を強調して考えると、つぎに出てくる言説AはWと解釈され、そのコンテキストにしたがつて、つぎは言説3に着目する。すると言説Bが言説3と因果律で結びつけられ、解釈Xが発生するというのがIのケースである。どの言説を強調するかによって全体の解釈も

変わってくるのである。

教科書会社によつては、ⅠかⅡどちらかの流れのみを教えろと言うのだろし、Ⅰ・Ⅱを教員用の指導書では併記して、どちらかを探り、もうひとつは触れてもいいし触れなくてもいいとする教科書会社もあるだろう。両説併記して生徒の解釈に任せましようというのもあるかもしれない。

しかし本当に望ましいのは、Ⅰ・Ⅱを融合させて、別の新しいⅢという解釈の流れを作り上げる授業であらう。しかしこれはなかなか難しい。複数の先行論文を読み込んで、テキスト内にどのような流れがあるのかを自分なりに見つけ、それら複数の流れを統御できなければならぬだろう。教員一人での読み込みだけでは、単一の流れしか発見できない可能性が大きいだろう。先行研究、複数の指導書、他の教員との議論なしには教材研究はできないだろう。

※ ※ ※ ※ ※ ※

最近文科省は「アクティブ・ラーニング」という言葉を捨てたようだが、自分で考える生徒参加型の授業というのは捨ててはいないようだ。

これに触れる前に、僕もほとんど知らない大昔の中高校生の伝説を召喚したい。講談社文芸文庫を手にとってみて、筆者来歴に目を通した人にはわかつていただけると思うのだが、昔の文学青年たち（が、いまの中学高校のとき）の多くが同人誌を発行し（職業作家たちも同人誌を主宰していた）、合評会を行い、ときには職業作家たち（あるいは尊敬できる教員）にそれを送り、あるときには作家を呼んで合評会を行っていた。たとえば、吉村昭が三島由紀夫に同人誌を送り、評を聞きに行ったということを書き残してもいる（『遠い道程』（『少女加刑』文春文庫 二〇一八年））。

もちろん現代でも同人誌はあるし、俳句や短歌の世界では昔のような交流はあるだろう。しかしそこに高校生は、大学生はどれほどいるのだろうか。昔を美化する気などまったくなく、学校の教科書からテイク・オフして、議論し合うような機運はなくなってしまっている。アクティブ・ラーニングなどという官僚（経営者の益するために働く者）主導の形態でなく、かつての同人誌文化のようなものこそが、真のアクティブ・ラーニングであったはずである。青年層の文学場を破壊したのは、文科省的な教育場と経済場であらう。

だが、好きなマンガやアニメ、ゲームについてはSNSなどでいまだに議論はなされているのであろうし、オフ会やフェスなどで議論的なものはあるのではないかと思う。しかし、そこに理論的な議論はあるのだろうか？「好き／嫌い」、「推し／非推し」によって棲み分けがなされ、テキスト自体の解釈や批評へまで議論は〈礎〉を降ろしているのだろうか。必要なのは共有されるべき分析用語なのである。対話が成立するためには、同じコードが必要であろう。それは、「あれもいいよね／これもいいよね」ではない。意見の違う者同士が、優秀もしくは別の複数の解釈から、止揚していくことが重要なのであり、複数の意見がでたからいいということではないだろう。

たったひとつの答え（真実）など存在しない。しかしどれでも答えだよという無責任体制もあつてはならない。いま・ここではこのコンテキストやコードに従って、このように解釈するのが妥当だと思うが、それは〈暫定的〉なものではないと言い切る勇気が必要なのだと思う。

※ ※ ※ ※ ※ ※

生徒たちが話し合い、自分（たち）なりの意見を述べ

たときに、何を見落としているのか、何を解釈し間違っているのかを、生徒たちが出せないときにアドヴァイスできるように膨大な知識と論理的知性を備えていなければならないのが教師という職業についている者の使命であろう。

そのためには複数の読解があるべきなのだ。テキストがひとつの解釈で完結することなど永遠にない。それはじつは法律にカンしても言えることであろう。判例や法律の解釈、この事案で使用する法律はどれがいいか、複数の観点から考え抜かれるのである。そうでなかったら同じような事件について複数の判例が発生するはずはないのではないだろうか。

新指導要領が、契約書を読み間違えない能力を重視しなければならぬ（デノテーションを着実に読み取れる能力の必要性）と考えているようであるが、法律こそ判例、法律の解釈によって判決は一義的に決定されることはない。法律の条文もある意味〈文学〉なのである。どのように解釈するかは解釈者の立場、コンテキストやコードによって違う。しかし、「じゃあ、そういうことで。じゃあね」では終われない。そこで必要なのが対話であろう。

そして日常会話も含めて、すべての言説はデノテーション（第一義的意味）／コノテーション（第二義的意味）から成り立っている。コノテーションを読めない、コノテーションの存在を想定できない（読み）に、どれほどの日常的能力（いま・ここではこのコンテキストとコードにのっとって相手の言っていることを理解しておく方が安全だろう。でもさ、別の解釈もあるよ。言うとな面倒だから言わないけどね、くらいのずる賢さが必要ではないか）が期待できるのであろうか。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

教科書が読めない生徒がいるという恐るべき現状がある。しかしそれは全員が同じ地平で同じ内容のものを、同じように読み取るべきだという、おろかな検定教科書を使用しているからなのではないか。検定教科書などを使用している、先進国など存在しない（大津尚〔2009〕）。国際基督教大学の学生（帰国子女もいる）に実際に聞いた。「アメリカもヨーロッパもみんな、私はこういう意見だ」という授業を中高でもやってるらしいじゃん？。すると皆が言うのは、そういう学校もあれば、座学的な学校もある。棲み分けをしているのであろう。検定教科

書のもと皆が同じように授業を理解しようという方がおかしいのである、必要に応じて、生徒が求めるものに応じて、授業内容や教科書は変えるべきなのだ。単位制高校が魅力的なのはその点にあるのではなからうか。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「研究余滴」といいながら、「研究ノート」くらいの分量を書いてしまったが、ほんとうに余りに余った「思い」を書きつかねた余滴である。

「新学習指導要領」のもと教科書も国語教育も大きく変化を迫られるであろう。それがどのようなものなのかまだ霧のなかである。

そうではあるものの、日本において「学ぶ」とは「まねぶ」「まねをする」を語源として持つ。さまざまな現象を「まねる」ことで「学んでいく」のである。歌舞伎を観てみたらかかるだろう。同じ外題、同じ内容でも、「何代目誰々」のやり方をまねて、学んで演じる役者がいれば、別の人の芸をまねて、演じる役者もいる。ひとつの所作を偶然として演じるか、強い意志を持って行つたと演じるか、さまざまな演出のなかから、「今回」は選んで、「まねび」、「学び」、そして演じるのである。「次回」

は、あるいは「先回」は別の演出で演じていたかもしれないのに。

「learn」とはもともと《知識を身につける》という意味で、「study」（語源はラテン語で《しっかり進む》だそう）した結果やってくるものであるらしい。「study」して「learn」するとは《しっかり見つけて、身につける》ということだ。相模女子大学日本語日本文学科のスローガン《ゆつくり学ぶ、しっかり生きる》とすごく似ている。「learn」ばかりでは中身はスカスカになる。

さて、大学の学生も（小中高の生徒も、もしかしたら絵本を読んでいる幼保の子どもたちも）、大学（学校）で複数の解釈を知り、自分の解釈を相対化し、そこからまた新しい解釈を考えていったであろう。それこそが複数の〈生〉を擬似的に体験したということなのであると思う。

「わたしなんかの考えより、××先生（あるいは○○さん）の言うことのほうがいいに決まっている」と思ったら、試合は終了である。「いや、でも」という日常では嫌われるような介入・転換こそが思考を持続させる。「まねぶ」学生はそこから「学び」へと至り、自分なりの解釈を示し、そして対話するなかで再び「まねび」、「学

び」、新しい思考へと生まれ変わるのではないだろうか。「学ぶ」ことは一義性への従属ではなく、複数性への解放を可能とするのである。そして一時ひとつの答えにたどり着いたとしても、それは暫定的なものでしかなく、つぎの思考へと、新しいコンテキストやコード、知識を見つけ出したら、飛翔せずにはいられないだろう。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

相模女子の学生さんたちは、自分の思いつきを「ただの思いつきだから……」とすごく弱気になる。でもみなさんの思いつきはすごく「面白い」のです。そしてそのような「面白い」思いつきは複数出てくるのです。それをいかに論理的に対話の場に持ち込むかに苦手意識を持ってしまっているのが、僕的には残念なのですし、それを発展させられなかったとしたらすべて教員である（手助けする者としての）僕のせいなのです。

みななすごく面白い。文科省が要求するような一義性をとづくに越えていける可能性を持っているのですよ。

★

同僚であった（大学教員としては先輩の）狩野雄先生が異動されるのが二〇一九年四月である。狩野先生がつねに言っていたのは「学生の学び」ということであった。現状に満足してしまっているかのようにみえる学生に、「学び」を通して、新しい「自分」へと脱皮してほしい、「再生reborn」できるとつねに信じて教育をしていたのが狩野先生であった。そして相模女子大学の学生のいくらか（数はわからない）が、文学を学ぶことは即効性を求めるのではなく、さまざまな解釈があるという事実を生きていくしかないを知り、そして自分なりに腑に落ちる解釈にたどり着く時期がやがてやってきて、しかしそれがゴールではなく、また新しい時期が来ると、その時期にフィットした腑に落ちる解釈にたどり着くということとを、知っている、いや狩野先生から「学んだ」のではなかったろうか。

僕がつねづね主張しているのは、「教員というのは置いていかれる存在だ」ということである。毎年毎年、学生は旅立っていく。さまざまに「学んで」新しい世界へと、その「学んだ」ことを携えて、新しい世界へと飛翔していく。そして新しく「学び」、脱皮し、また飛翔する。

残されるのは、教員なのだ。それは淋しいことでもあるが、うれしいことでもある。

今年は、学生の皆さんとともに狩野先生も旅立っていく。

残された僕はそれでも、つぎの学生たちのためになんとかかんとか一生懸命「学び」のお手伝いをしていく。今年の四年生は面白かった。僕もいろいろ学んだ。「要反省」とか「それはダメ」とかをしっかり「学んだ」。そして狩野先生からもいろいろ学んだ。その学んだことを「まねび」、これからなんとか生きていこう、教育をしていこうと思っている。

お礼のつもりで書いた付記（★以降）であるが、自分への叱咤激励になってしまった。

ごめんなさい！

みなさん、お元気で、アデユ！

【注】

（1）そして何度も言われているような《子供を産んで育てる環境がないのにどうしたら子供を産めるんだ！ 環境を整えてよ！》という主張にかんして

は無視されている。おじいちゃん政治家たちは、《子供を産め》という、そして《女性も社会進出すべきだ》とも言う。このふたつが両立するのが難しいことを、彼／女らにはわからないのだろう。なぜなら、専業主婦制度（じつは専業主婦の年俸は約三〇〇万円であることも知らないのだろう）にどっぷり浸かっているか、子育てをせずに（あるいは終わってから）家政婦さん（もったいい言葉があるかもしれない）をしている方に薄給を支払って、自分たちの生活を円滑に回しているからなのだろうか。自分たちが課しているダブルバインドに気づかず（気づかないふりをして）、その時々都合のいいことだけを言っている。いまは、産んでも地獄／産まなくても地獄という情態にさせられてしまっているのだ。

「保育園落ちた。日本死ね」という言葉の（意味）も理解できないのであろう。保育園に落ちたら両親のどちらかは働けない、働けないなら子どもは持てない……でも、「産まない奴が悪い」と言われる。なんだ、そりゃ?? ワンオペで母親の介護を試みたらどうでしょう、安倍晋三さん。

介護士の給料が低すぎるというので、外国から助っ人を呼んできて、安くこき使う。給与を上げて、日本の若者たちの人気職種にすればいいのである。弁護士の人数が多いの少ないの、医者が多いの少ないの、教員の数がそのうち激減するの……大学院を拡大しようの……これはポストがなさ過ぎて、いまは高学歴プアを生み出している。現実には九州で非常勤研究者を続けていた人が自殺もしている（2019/09/05）。地方の医者も看護師も弁護士も介護士も足りない。教員は過重労働である。

「少子高齢化が悪いのだ」というが、そうなることは三〇年以上前からみんな知っていたことだ。大学院を増加させたとき、すでに学生数が二〇年後には激減することも、ポストが足りなくなることもわかっていた。日本文学系のポストが減っていくことは、一九九〇年前後には常識であった。いったいなにを反省しているのだろう。「産まないから悪い！」

すべて人のせいである。「産めない、育てられない、生活できない」から「産まない」のだ。そこについては劇的な変化はない。

【参考文献】

- 大津尚志 [2009]:「英仏独日の教育課程基準と教科書に関する研究」(「武庫川女子大学大学院 教育学研究論集 第4号」)
- 大津雄一 [2018]:「子午線 新『高等学校学習指導要領』雑感」(日本文学協会「日本文学 二〇一八年十一月号」)
- 大橋陽介 [2019]:『使える! 「国語」の考え方』(ちくま新書)
- 紅野謙介 [2018]:『国語教育の危機—大学入学共通テストと新学習指導要領』(ちくま新書)
- 小森 潔 [2017]:「子午線 変わること／変わらないこと—「新学習指導要領」と今後の国語教育」(日本文学協会「日本文学 二〇一七年十月号」)
- 高木 信 [2006→2009]:「教えられるのか」／「どう学ぶのか?」という問題機制—〈理論〉が拓く地平」(『死の美学化』に抗する 『平家物語』の語り方』青弓社)
- 日本語学 [2018]:『日本語学 特集 中学校・高等学校『国語』新学習指導要領はどうなるか』(「日本語学 二〇一八年十一月号」明治書院)

※平成二九年度告示「中学学習指導要領国語」、「平成三十年告示高等学校学習指導要領国語」、日本語学 [2018] によった。

(本学教授)